



営農タイムリー！



発生予察情報について(9月)

2023年8月29日発行

病害虫発生予報第7号(9月)

京都府病害虫防除所より、9月の予察情報が発表されました。

病害虫発生予察第7号(9月) (抜粋)

作物名	病害虫名	予想発生量 (平年比(前年比))
イネ	穂いもち(中晩生) 紋枯病(中晩生) トビイロウンカ(中晩生) コブノメイガ(晩生) 斑点米カメムシ類(中晩生)	<u>やや多</u> (並) やや少(やや少) 並(並) 並(並) <u>やや多</u>
ブドウ	べと病	並(並)
カキ	うどんこ病 炭疽病	やや少(並) 並(並)
果樹全般	カメムシ類	やや少(少)
果菜類	うどんこ病 疫病・褐色腐敗病 アザミウマ類	やや少(やや少) 並(並) やや少(並)
果菜類等	ハモグリバエ類	やや少(並)
キュウリ	褐斑病 炭疽病	<u>やや多</u> (<u>やや多</u>) 並(並)
野菜全般	ハダニ類 アブラムシ類 ハスモンヨトウ	<u>多</u> (<u>やや多</u>) 並(やや少) <u>やや多</u> (<u>やや多</u>)
ネギ	ネギアザミウマ ネギハモグリバエ シロイチモジヨトウ	やや少(並) やや少(並) <u>やや多</u> (<u>やや多</u>)
アブラナ科野菜	コナガ	少(少)
ハウレンソウ	シロオビノメイガ	<u>やや多</u>

イネ

1. いもち病（穂いもち：中晩生）

予報内容 発生量： **平年比 やや多い**（前年並）

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）上位葉へ進展した**葉いもち**の病斑は、**穂いもち**の重要な伝染源となる。
- （2）穂ばらみから出穂後約3週間に、日照時間が少なく多雨多湿であると発生が多くなる。
- （3）発病に要する温度範囲は、14～30℃、適温は25℃である。
- （4）出穂後曇雨天が続く場合には、傾穂期前後にも防除を行う。特に枝梗は遅くまで菌の侵入を受けるので、枝梗いもちの発生に注意する。
- （5）ヒノヒカリ、祝等、発病しやすい品種では注意する。



2. 紋枯病（中晩生）

予報内容 発生量： **平年比 やや少ない**（前年比 やや少ない）

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）高温多湿で発病が助長され、病斑が上位へ進展すると被害が大きくなる。
- （2）昨年多発したほ場では、浅水管理に心掛け上位葉鞘への進展を抑える。
- （3）ほ場内をよく見回り、病斑が上位へ進展している株が多い場合は防除を行う。



3. トビイロウンカ（中晩生）

予報内容 発生量： **平年並**（前年並）

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）多発すると坪枯れ等の被害を起こす。
- （2）8～9月の気温が高いと増殖に好適である。
- （3）低湿田、通風不良田、多肥田等では発生しやすいので注意する。



4. コブノメイガ

予報内容 発生量 : 平年並 (前年並)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が葉を筒状に綴って食害し被害痕が白く目立つが、収量・品質に影響がでるのは上位葉の被害が多い場合のみである。少し食害が目立つ程度であれば、収量・品質にはほとんど影響はない。
- (2) 晩植・多肥田やこれらの水口付近、生育の遅いイネには成虫が集中的に飛来するので注意する。



5. 斑点米カメムシ類 (中晩生)

予報内容 発生量 : 平年比 やや多い

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 稲穂を吸汁加害し、斑点米の原因となるカメムシ類には多くの種類がいるが、近年、カスミカメムシ類及びイネカメムシによる被害が増加している。
- (2) 薬剤防除を行う場合、粉剤や液剤では穂揃期と傾穂期の2回防除(共同、一斉)が有効である。また、粒剤では種類により使用期限が決まっているので、防除適期に施用する。
- (3) これまでに山城地域と丹波地域の一部でミナミアオカメカメムシの発生を確認している。本種は他の斑点米カメムシ類に比べて体が大きく吸汁量が多いため、少量でも被害が大きくなるので注意する。

イネホソミドリカスミカメ



イネカメムシ

ミナミアオカメムシ

果 樹

1. フドウ ベと病

予報内容 発生量 : 平年並 (前年並)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 本病の発生適温は22～25℃である。気温が低下し、降雨が続くと、発生が多くなる。
- (2) 病原菌は落葉した被害葉の組織内に卵胞子を形成して越冬し、翌年の感染源となるため、集めて適切に処分する。



葉 表

葉 裏

2. **カキ** うどんこ病

予報内容 発生量 : 平年比やや少ない (前年並)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 本病の発生適温は15～25℃である。夏季の高温時には病勢が治まるが、9月に入って気温が低下すると、病原菌の活動が再び活発になる。
- (2) 秋季に発病した葉の裏側には、白い菌叢が見られる。9月下旬には、菌叢の中に黄色から橙紅色の粒点が現れ、やがて黒点の子のう殻が形成される。子のう殻は落葉とともに土中で越冬し、翌年の感染源となるため、集めて適切に処分する。



3. **カキ** 炭疽病

予報内容 発生量 : 平年並 (前年並)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 9～10月に雨が多いと、果実の被害が増える。
- (2) カキノヘタムシガ、ハマキムシなどの食害部から発病することが多いので害虫防除も徹底する。
- (3) 本病は、被害枝や被害芽のなかで菌糸の状態越冬する。



4. 果樹全般 **カメムシ類**

予報内容 発生量 : 平年比やや少ない (前年比 少ない)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) **カメムシ類**は局地的に発生し被害をもたらすこともあるので、園内外の成虫発生状況をこまめに観察し、発生を認めたら早めに防除すること。特に、山林等の隣接園では注意が必要となる。
- (2) 収穫期に近い果樹は、他の病虫害防除も含めて、農薬の使用にあたっては使用基準(特に収穫前日数)を厳守する。
- (3) 合成ピレスロイド剤の連用は、ハダニ類やカイガラムシ類が多発する恐れがあるので避ける。

チャバネアオカメムシ



チャバネアオカメムシ卵

野菜

1. 果菜類 うどんこ病

予報内容 発生量： 平年比やや少ない（前年比やや少ない）

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）気温20℃前後、比較的低い湿度で多発する。
- （2）施設栽培で発生しやすく、高温乾燥が続くと発生が多くなる。
- （3）窒素肥料の過用を避け、茎葉が繁茂し過ぎないようにする。
- （4）トウガラシ類では、ハダニ類による被害との判別が難しいので、被害葉を十分に観察する。
- （5）菌糸が組織内で増殖するので、薬液が十分付着するよう丁寧に散布する。

2. 果菜類 疫病・褐色腐敗病

予報内容 発生量： 平年並（前年並）

発生生態及び防除上注意すべき事項

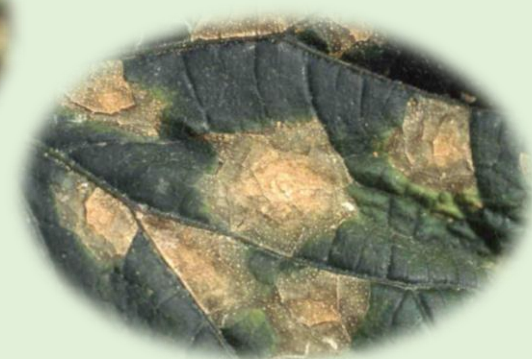
- （1）病原菌は水媒伝染し、多湿条件下で発生が多い。特に、豪雨により冠水、滞水したほ場では発生に注意する。
- （2）ほ場の排水に努める。特に、降雨時の地表水を速やかに排水する。
- （3）マルチを行い、泥によるはね上げ伝染を防ぐ。

3. キュウリ 褐斑病

予報内容 発生量： 平年比 やや多い（前年比 やや多い）

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）発病適温は25～30℃で、高温多湿条件下で多発する。
- （2）一度発生したほ場では、毎年発生がみられることが多い。
- （3）施設栽培では換気を十分に行い、かん水も過多にならないようにし、高温多湿に注意する。
- （4）窒素質肥料の過多は耐病性を低下させ、一方、肥料切れや成り疲れによる草勢の衰えは発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。
- （5）被害葉上の胞子は乾燥状態では相当長く生存するので、被害葉は土中深く埋めるか焼却処分する。



4. キュウリ 炭疽病

予報内容 発生量 : 平年並 (前年並)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 気温22～24℃で降雨が続くと伝染、まん延しやすい。発病後の防除は効果が劣るので、予防、早期防除に重点を置く。
- (2) 種子伝染するほか、被害作物の残さ、資材等が伝染源となる。
- (3) 窒素質肥料の多用は発病を助長するので注意する。

5. 野菜全般 ハダニ類(チャノホコリダニを含む)

予報内容 発生量 : 平年比多い (前年比やや多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主に葉裏に生息し、乾燥条件で発生しやすい。
- (2) 薬剤が葉裏や生長点にかかるよう丁寧に散布する。
- (3) **ハダニ類**は薬剤に対する抵抗性が生じやすいので注意する。
- (4) 雨よけ栽培では発生しやすいので十分注意し、発生初期の防除に留意する。
- (5) ハウス内及びほ場周辺の除草を徹底する。



カンザワハダニ
体長0.34～0.44mm



ナミワハダニ
体長0.35～0.4mm



チャノホコリダニ
(体長0.1～0.5mm)
ナス果実被害

6. 野菜全般 アブラムシ類

予報内容 発生量 : 平年並 (前年比やや少ない)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) **アブラムシ類**には直接吸汁加害するだけでなく、**モザイク病**を媒介するものもいる。
- (2) 通常、無翅虫で集団加害するが、密度が高まると有翅虫が現れて分散し、発生が拡大する。
- (3) 高温乾燥が続くと発生が多くなる。
- (4) キュウリの**急性萎凋症**の発生が多いところでは、**アブラムシ類**の飛来に注意する。

7. 果 菜 類 アザミウマ類

予報内容 発生量 : 平年比 やや少ない (前年 並)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) **アザミウマ類**には直接加害するだけでなく、**ミカンキイロアザミウマ**や**ネギアザミウマ**等 **ウイルス病**を媒介する種もいる。
- (2) ハウスや雨よけ栽培では、高温乾燥が続くと特に多発しやすいので、注意する。
- (3) ハウス内及びほ場周辺の除草を徹底する。

8. 果菜類等 ハモグリバエ類

予報内容 発生量 : 平年比 やや少ない (前年 並)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) **トマトハモグリバエ**は、8月以降多発する傾向がある。
- (2) 苗からの持ち込みを防ぎ、被害植物の残さは土中に埋めて処分する。施設栽培では、開口部に0.8mm目合いの防虫ネットを張る。
- (3) **黄色**粘着ロールをハウス周囲及び開口部に展張する。
- (4) 幼虫が葉の中に潜り込み食害するが、その期間は3日程度と非常に短いので、薬剤を散布する場合は発生確認後速やかに行い、防除時期を逸しないようにする。
- (5) 施設マルチ栽培では、マルチ上に落ちた蛹を掃き集めて処分する。

9. ネギ ネギアザミウマ

予報内容 発生量 : 平年比 やや少ない (前年 並)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間、10世代以上くり返し、葉の表層を食害し、かすり状の食害痕を残す。**ネギ**では葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
- (2) **アイリス黄斑ウイルス**(*Iris yellow spot virus: IYSV*)による病害で**ネギ** **えそ条斑病**を媒介する。
- (3) 薬剤散布の他、**赤色**系防虫ネットやUVカットフィルムによる物理的防除が効果的である。
- (4) 被害葉及び収穫残さが本虫の発生源となるので、残さは一箇所にとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (5) 殺虫剤散布後は効果を十分に確認し、感受性の低下が疑われる場合は系統の異なる薬剤をローテーション散布する。

10. ネギ ネギハモグリバエ

予報内容 発生量 : 平年比 やや少ない (前年並)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。
- (2) 産卵から羽化までの発育所要日数は20℃で約36日、25℃で約23日程度である。
- (3) 被害葉及び収穫残さが発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (4) 1葉あたり1～数匹の幼虫が加害するバイオタイプA(従来系統)とは異なり、10匹以上の幼虫で集中的に加害し、葉を白化させるバイオタイプB(別系統)の発生を確認しているので注意する。



被害部拡大

11. ネギ シロイチモジヨトウ

予報内容 発生量 : 平年比 やや多い (前年比 やや多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 本種は齢が進むと、薬剤の効力が低下するので、ほ場をこまめに観察して早期発見に努め、若齢期の防除を徹底する。
- (2) 被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (3) 本種は寄主範囲が広く、ネギ以外に豆類、野菜類、花き類を加害するので注意する。



卵

12. アブラナ科野菜 コナガ

予報内容 発生量 : 平年比 少ない (前年比 少ない)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 防虫ネット等を利用し、物理的防除に努める。
- (2) 発生回数が多く(10~12回/年)、各発育段階(卵、幼虫、蛹、成虫)が同時期に混在する。



13. ホウレンソウ シロオビノメイガ

予報内容 発生量 : 平年比 やや多い

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 秋季の気温が高く、雨が少ないと発生が多くなる。
特に、施設栽培や雨よけハウスでは多発しやすいので注意する。
- (2) 早期発見に努め、若齢幼虫期の防除に留意する。



14. 野菜全般 ハスモンヨトウ

予報内容 発生量 : 平年比 やや多い (前年比 やや多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 発生は10月下旬頃まで続く。発生量は9月上中旬に最も多くなる。
- (2) 成虫は葉裏に数百個の卵を塊状に産みつける。卵塊は綿毛状のもので覆われ、卵粒は見えにくくなっている。ふ化した幼虫は若齢期(1~2齢)を集団で過ごし、葉の表皮を残して裏側を食害する。食害された葉は白く透けて見えることから白変葉と呼ばれ、発生初期の目安となる。
- (3) 齢が進んだ幼虫は周囲に分散し、かつ、薬剤の効力が著しく低下するので、ほ場を見回り白変葉の早期発見に努め、幼虫分散前の白変葉を取り除くとともに、薬剤散布を行い、初期防除に努める。



今後注意すべきその他の病害虫等

野菜

1. トマト黄化葉巻病及びトマト黄化病

トマト黄化葉巻病は、黄化葉巻ウイルス(TYLCV: Tomato Yellow Leaf CurlVirus)の感染により引き起こされる病気で、症状は、先端部の葉が内側に巻く、葉縁が黄化、株の萎縮等で、**タバココナジラミ**によって媒介される。

トマト黄化病はトマト退緑ウイルス(ToCV : Tomato chlorosis virus)の感染により引き起こされる病気で、症状は葉の一部の葉脈間が退緑及び黄化し、生理障害の苦土(マグネシウム) 欠乏の症状に類似し、タバココナジラミ及びオンシツコナジラミによって媒介される。府内での発生を昨年6月に初確認している。

2. タバココナジラミ

タバココナジラミは世界中に分布し、多くのバイオタイプ(形態的な区別が難しく、遺伝的、生物学的に異なる系統)が存在する。本州では在来系統(バイオタイプJ p L等)、バイオタイプB、バイオタイプQが確認されている。

バイオタイプQは薬剤感受性が低く難防除害虫であるので、以下の3点を防除対策の基本事項として、防虫ネットや黄色粘着ロール及び農薬等を組み合わせた「総合的害虫管理」が有効となる。

・施設内にコナジラミを「**入れない**」。

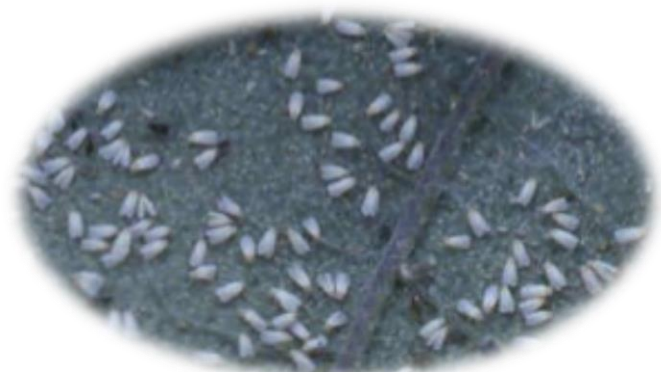
- (1) 開口部の防虫ネット被覆。
- (2) 黄色粘着ロールの展張。
- (3) 近紫外線カットフィルムの使用。

・施設内・施設周辺のコナジラミを「**増やさない**」。

- (1) 発生初期の防除の徹底。
- (2) 薬剤のローテーション防除の実施。
- (3) 天敵や微生物農薬の有効利用。

・施設内からコナジラミを施設外に「**出さない**」。

- (1) 開口部の防虫ネット被覆。



オンシツコナジラミ



タバココナジラミ成虫

タバココナジラミ幼虫



野菜

3. タバコガ類(オオタバコガ、タバコガ)

これらの害虫は発生が多くなると、大きな被害になるので注意する。特にナス、トマト等の果実に食入すると薬剤が効きにくくなるので、早期発見に努め、食入前の防除に留意する。



4. 軟腐病(キャベツ、ハクサイ、カブなど)

発生すると大きな被害となるので予防防除に努める。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) ほ場の排水に努め、雨水が停滞しないようにする。施肥は、窒素過多にならないよう注意する。
- (2) 台風等の風雨による傷や泥のはね上げにより発病が助長される。また、キスジノミハムシ、コオロギ等食葉性害虫の食害痕から細菌が侵入して発病することが多い。
- (3) 台風等による強い降雨の後や害虫の食害が目立つ場合は、早期防除に努める。

5. ハイマダラノメイガ[ダイコンシンクイムシ](アブラナ科)

生育初期に加害されると欠株等が生じ、大きな被害となるので注意する。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 8月下旬以降、10月下旬頃まで発生する。
- (2) 株の生長点部を食害するため、被害株は生育が停止したり、枯死するものが多い。
- (3) 苗床や定植直後によく観察し、発生を認めたら直ちに防除する。
- (4) は種直後から寒冷しゃ等で被覆を行い、産卵を防ぐ。

6. ネギべと病

盛夏期の高温により発生は一旦終息しているが、ほ場にすき込まれた罹病残さ等が感染源となり、気温が20℃を下回る10月中旬以降は、病原菌の活動が再び活発になるので、発生には十分注意する。